

月報 岡崎の教育

2月号

平成2年2月1日

発行/編集

岡崎市教育委員会

ヒマラヤスギの幹の間から
朝陽が顔を出している
運動場は一面大木のかげ
今日もM子の顔が見えた
よかった……
もう迎えに行かなくていい

駆足曲にあわせて 全校が走り出す
M子も走っている
登校拒否で

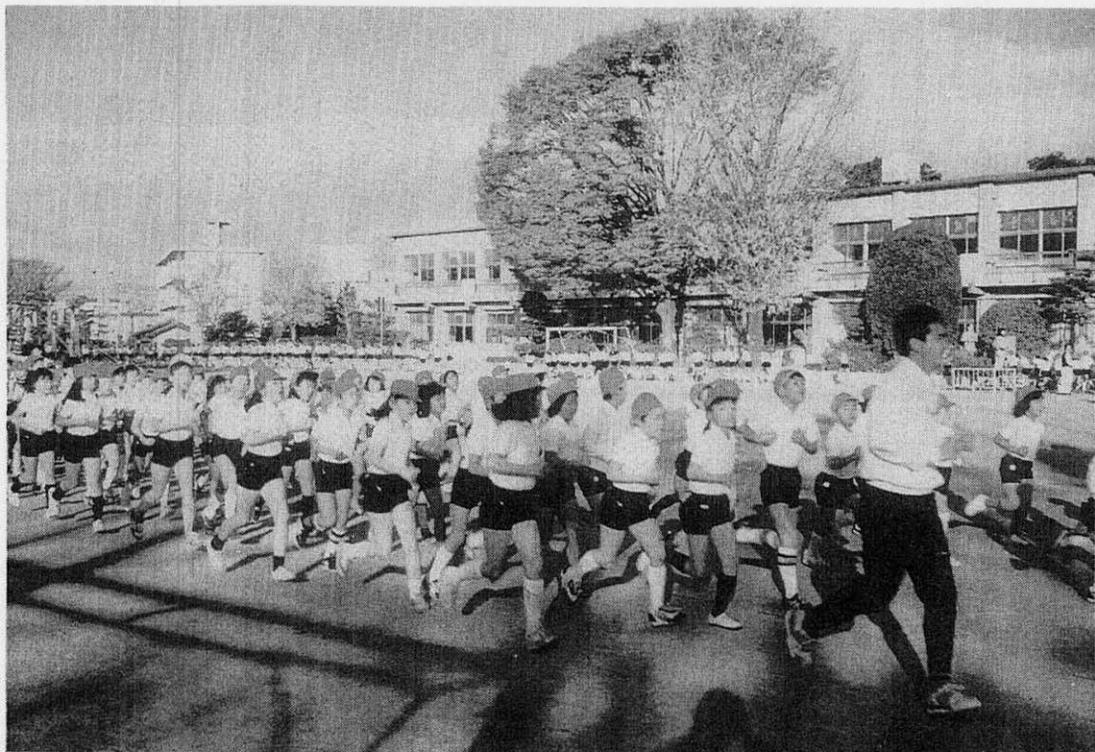
去年は一度も走っていないのに
頭一つ分とび出た大きな体がゆれる
理由をつけては見学していた
運動嫌いなM子

M子が走っている
周りの足並に遅れながらも

並足曲にかわり 行進を始める
M子の目に 光る涙を見た

「がんばったね。」
「やればできるね。」
うなずくM子の桜色の顔に
白く吐く息が眩しい

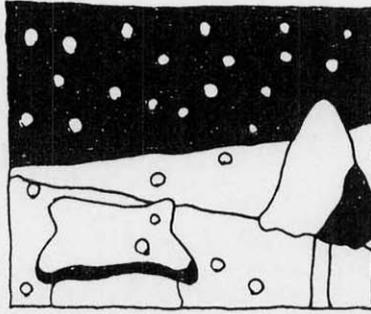
（走れたM子）



(かけ足朝会—広幡小)

NHKの鈴木健二アナウンサーの著書『氣くばりのすすめ』がベストセラーとなつて、多くの人々に読まれたことはまだ耳新しいことである。その中で、最も多く読んだのが二十代の若者であり、筆者への手紙には、「人間としての生き方が初めてつかみ取れた気がする」という内容がほとんどであったという。

氣くばりを、「他人に対する道徳律ではなく、人間が生きていくための常識」と考えた場合、二十代の若者はそうした



常識を誰からも教えてもらえなかったことになる。そして、その責任が親や教師にあるとすれば、教師であった私は教えるにどれほどのことができただろうと考へていた時、机上にある一枚の葉書きが目にとまった。

その葉書きは、会社勤めをしている娘あての上司の転任挨拶状である。普通、父親のほとんどは、子供の上司の異動まで関心をもちたないものだし、子供も親な

どには話さないものだと思う。

ところが、会社勤めの二年目に入った娘が、五月の中頃より上司である所長の転勤をしきりに気にするようになった。

「あんな部下思いの所長さんが代わられたらつまらんなあ。」

「何言ってるんだ。お前たちのような新入社員の小娘に、雲の上にいるような所長のことなどわかるもんか。」

とは言つたものの、何度も聞かされると氣になるものである。

— 教育随想 —

氣くばり

横 井 滋

この会社の人事異動は役職が七月一日で、一般社員は八月だという。毎年新聞に出ると言うから、「K営業所長I・K」の名前だけは覚えておこうと思うようになっていた。そして、六月下旬の新聞はI・K氏の本店企画室長としての異動を載せていたが、娘には黙っていた。

七月下旬のある日、私あての郵便物の間に娘あての一枚の葉書きが入つていた。がり版刷りの温かさとい・Kの名前が興

味を誘い、知らぬ間に手紙の文面に引き入れられていた。

「拝啓 梅雨の晴れ間の強い陽射しに夏近しが、ひとと感じられます。」

私、このたびの人事異動で本店企画室へ転勤になり、過日赴任いたしました。今度の仕事は初めてのものであります。が、経験プラス勉強で、何とか勤めを果たそうと思つております。

さて、在任中は何かと手助け下さり、

（若い人達は、上司の言われたことを一所懸命やつてくれたことがそれにとたると思ひます。）大変有難うございました。

所長着任に当たつて申し上げた三つのこと（おこらない。あわてない。ペストを尽くす）がどれだけ出来たかは、ちょっと自信がありませんが、全体としてみておおむね充実した日々が送れたと思ひます。また、将来自分の人生が終わる頃、振り返つてみて、この三年間が最も楽しく張り合いのあつた日だったということになると思ひます。

こんな事が言えるのも、ひとえに皆様方のお力添えのお陰と、心から感謝いたしております。（略）

敬具（一九八八、七）

そして、ペン書きのていねいな文字で、「父母様へ。毎日明るく、本当に良くやつてくれています。有難うございます。心憎いまでの氣くばりではなからうか。

（岡崎市長）



絶対負けちゃうもん、

そんだ

算数・数学科指導員

本多有三

「ぼくたちなんか三メートルもはなれるのに、T君たちは一メートルしかないじゃん。」

「ぼくたちのが絶対負けちゃうもん、そんだ。」

三年算数「円」の学習の導入授業で、班対抗の「輪投げゲーム」終了直後の子供の声である。

長方形の枠の周りに八チームが分かれてゲームをしたのだから当然の不平かもしれないが、しめたと思つたのは先生。ねらい通りに出てきた子供の不平なのである。すかさず、

「そうか、長方形でいいと思つたけれど失敗だね。じゃあ、どうしたらみんな公平にゲームができるかなあ。」

と、先生の切り返し発問がとぶ。

子供の実態を把握し、それをうまく利用した授業であった。

すぐには、円に到達しなかったが、円に集約される過程では、既習事項を駆使

ふるさとシリーズ

この人に聞く



日本画家

畔柳 嚇氏

日本画家で、岡崎の美術協会会長、文化協会美術部長の要職を務める畔柳嚇さんを、六供本町のお宅に訪ねたのは冷たい雨のそぼ降る師走の夕方のこと。お忙しい仕事の合間を縫い、快く取材に応じてくださいました。

畔柳さんが画家を志されたのは、絵が好きだったからというところである。が、そこに大きく影響しているのが、小学校時代に初めて大草山を写生した時の、担任の先生の一言だったと言われる。

「当時は、山というふうにみな平面に塗ってたんですよ。それを、私は谷をかいいたんです。どう見てもそう見えるんでね。」

その絵を、「おもしろい絵をかけたなあ。」と、非常に褒めてくれた先生があったんです。珍しい絵だったらしく、兵隊検査に行った時にもまだ飾ってありました。

このことが、画家としての道を歩む一つのきっかけになったとのこと。

「褒められるってことは、たいへんな喜びだと思っただけ。だから、ぼくの教室では、ほんの僅かでも、昨日と変わったことができるようになったら褒めるようにしています。」

それが、教室に通う人たちが長続きするきっかけになっているそうである。

日本画にはいろいろ約束事があり、それは教えた方が早いと言われる。また、もの見方を最初は教えられるそうだが、そこから先は自分だとのこと。

「隣の人よりうまくなれ。『やれん』のと『やらん』のとは違う。できるまでやれ。」

と指導し、本人の気がつかないことを教えてやるのが先生の仕事だと考えておられる。

畔柳さん自身は、先生から、「風をかく」「水の流れをかく」ようにと教えられ、風に揺れる木々や川の流れを毎日写生して、どのようにかけばよいかを見つけた。初めにかけた絵は、荒井山の雑木林を半年間毎日写生した中から生まれた作品とのこと。最近のお仕事では、岡崎城二の丸能楽堂の松と竹という大作があるそうである。

周囲の景色に負けぬよう、粗い絵の具を使い、乾かしては重ねるといふ作業を三か月も続けられたという。また、一年に一度は外国へ行かれ、雑音の入らない所で一日中絵に没頭されることも。

今年七十八歳になられるのに、このようにたいへん元気なのは、

「病気をすると絵が変わってしまうので、人と会ったら、必ずうがいと手洗いをする。それから熟睡すること。また、仕事中心によくよしないようにする。」など、日ごろから健康にはいろいろと気を付けていらっしやるからだとのこと。

「心が貧しいといい絵はかけない。」

絵に対する思いの伝わる言葉であった。

住 所 岡崎市六供本町一—二二—
生年月日 明治四十五年五月十日



して考えるという算数科のポイントもクリアすることができた。さすが、不平を言い出したO君は、図にかいて説明し、円の定義にせまるほどの勢いがあった。

アイデア先生

書写指導員

鈴木 三枝子

「わあっ、すごい鉛筆じゃん。」

小学二年生の子供の目が、一斉に先生の出した大きな鉛筆状の模型に引き付けられた。

「これはねえ、フェルトペンのつもりで作ったんだよ。」

と言って、笑顔で執筆法を説明する先生のまなざしに、温かい雰囲気を感じた書写の授業。硬筆による「かんじのはらい」の学習だった。

「はらい」は、昨今の丸文字問題にも繋がる大切な運筆法であり、基本をしつかり身につけておかないと、正しく読みやすい文字が書けなくなる虞れがある。それを低学年の児童にどのように体得させるかが、重要な鍵を持つ授業であった。

「はらう」ことを、日常の生活場面から考えさせ、机上の埃を羽根ほうきで先生がすすすつと払ってみせたことが理解を深めた。また、「線あそび」を通してねらいに迫っていったので、終盤の児童作品は、ほぼ全員、目標を達成していた。きれいな文字を書きたいという子供の願望を満たすのは、教師の指導法の工夫と、一言の褒め言葉なのではなからうか。



交通安全を呼びかける街頭行進

交通安全少年団は、児童に団体活動、奉仕活動を通して体験的に交通安全の知識を修得させ、車社会に対応できる人間形成を目的につくられたものである。

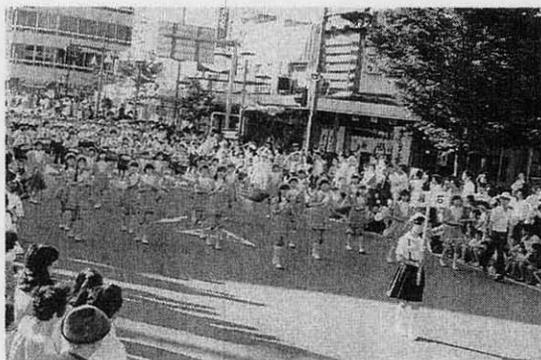
岡崎市では、昭和四十八年に羽根学区に初めて誕生して以来、次々と結成され、現在二十七団体を数えるに至っている。

各少年団は、学校をはじめ、学区内各種団体の協力によって自発的に結成されており、その活動は地域に密着し、児童自ら正しい交通ルールを実践するとともに、学区内パレード、街頭でのチラシ配布、バトカーの同乗による啓蒙、パトロールなど、幅広い活動を繰り広げている。

また、昭和五十二年に、各少年団を統一し組織された岡崎地区交通安全少年団連合



毎年夏に開かれる交通安全少年団連合総決起大会



交通安全推進音楽パレード



結団式に臨む交通安全少年団員

小さな手
大きくあげて
横断歩道

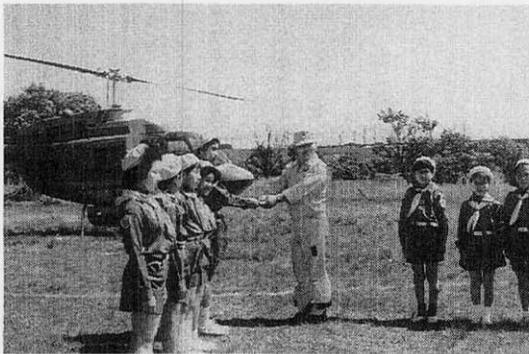
愛知県交通安全協会監修
岡崎南立寄宮小学校
1978.10.10



校庭を使った登校訓練



お年寄りへの交通安全ピラ配布



県警ヘリのパイロットから激励を受ける団員



現地登校指導

15歳以下の子供の事故

学別交通事故発生状況

平成元年1月~12月
(岡崎警察署調査)

学区	計	歩行者	自転車
梅園	12	9	3
根石	5	1	4
男川	4	1	3
美合	4	2	2
緑丘	4	3	1
羽根	11	3	8
岡崎	1	1	
六名	11	4	7
三島	1		1
美丘	3	1	2
竜尺	3	3	
連幡	3	1	2
広田	6	1	5
井岩	1		1
愛岡	7	5	2
福谷	1		1
竜川	2	1	1
藤中	3	1	2
山宿	3	2	1
平生	1		1
秦梨	1	1	

学区	計	歩行者	自転車
常磐南	0		
常磐東	0		
常磐田	0		
恵奥	1	1	
細川	2	2	
岩津	3	3	
大樹寺	4	2	2
大門	3	2	1
矢作東	6	3	3
矢作北	16	5	11
矢作西南	0		
矢作西	8	2	6
六ツ美中部	1		1
六ツ美北部	8	2	6
六ツ美南部	6	2	4
城南	1	1	
上地	5	3	2
小豆坂	1		1
北野	5	2	3
合計	157	70	87

は、春の「桜まつり家康行列」での街頭行進、夏の「交通安全総決起大会」、秋の「交通安全団鼓笛パレード」の実施など、各少年団との連携と活動の強化をはかっている。

平成元年中の全国の交通事故による死者は一万一千八十六人で前年より七百四十二人、七・二%増え、この十五年間で最悪の結果となった。愛知県県の昨年の死者は五百四十五人で、昨年より四十五人

多い。

岡崎市内小中学生の事故も死亡者、重傷者数は前年と変わらないが、横断中の事故や出会い頭の接触事故による軽傷者数は大幅に増加しており、ひとつ間違えば大事故になりかねない現状である。

車への依存度が増えますますます大きくなっていく今、交通少年団結成の意義がさらに重くなってきている。



大門カーニバル

大門小 松浦 由美

「うわあ、冷たい。」
「タイヤこすったら、びかびかになったよ。」

こは足洗い場。たてわり二十七班食パンマングループの子供たちといっしょに、一輪車をたわしてみがく。水といっしょに明るい笑い声がはじける。

今年も大門カーニバルがやってきた。これは通学団を基盤としたたてわり活動の一つで、各グループごとにお店を出して全校で遊ぶのだ。学年を越えた集団はまとまりを欠くこともあるが、教室の中とは違う生き生きとした子供たちの顔を見るこ

とができる。

「みんなの時間」にお店の相談をしていてもなかなか決まらない。パティンクセンター、的あて、紙しばい——男子と女子ではやりたいものも違う。そろそろ私の出番かなと腰をうかしかけると、ふだんおとなしい六年生のE男が立ち上がって、

「人力車屋はどうですか。遠足の時明治村で見て乗ってみたいかったし、楽しそうだから」と意見を出した。すると、

「一輪車でやろうよ。ざぶとんひいてさあ。」

「リヤカーも使おう。たくさんお客を乗せれるよ。」

「きれいにかざりつけしたら。」

わたし折り紙もつくる。

あちこちから次々に声があがりもう低・高学年の区別なく、自分たちのアイデアをふくらませていく。あつという間に、お店は決まり仕事の分担も決まった。それぞれの学年にふさわしい役割をもらって。

ああ、私が口を挟まなくてよかったです。子供たちは、こちらささゆとりを持って待っていてやれば、自分たちで考え、見つけ出し、削り上げていく力を持っているのだ。

カーニバル前日、きれいに洗

われたリヤカーと一輪車は、低

学年の子が作ったちり紙の花や色紙のくさり、高学年が知恵をこぼした背もたれ、看板などでかざられた。協力し合っただけでかざられた。協力し合っただけでかざられた。協力し合っただけでかざられた。協力し合っただけでかざられた。

他学年の子供たちが、ひとつになって行っていくこのためわり活動を大切にしていきたい。

教育日々



みせた底力

矢作中 太田 信政

合唱コンクール予選当日。

「心を込めて、二の八だけの渡り鳥の地図」を歌おう。四十二羽の渡り鳥を飛ばそう。

日々にならう言っていた子供たち。しかし、本選に出場することはできなかった。手に握っ

た千羽鶴は、汗でぐしゃぐしゃに

なり、歌い終えた時満足げに舞台から降りてくる顔つきは、本当にすがすがしかった。まるで、「自分たちはできる限りのことをやった。精一杯、最高の心で歌うことができた。」

と言いたげであった。

指揮者を決める時、A子は、「先生、私迷っています。私が指揮をしてみんなが歌ってくれるかどうか不安です。それに、私もみんなといっしょに歌いたいという気持ちもあるし……。」

と、迷う気持ちを打ち明けてきた。指揮は私の判断により、A子に任せることにした。しかし、数日後、A子は泣きながら不安な気持ちと、自分自身が情けないという気持ちを訴えてきた。

練習を始めて二十日以上たつというのにこんなことでは先が案じられたが、こは正念場、子供たちの気持ちが盛り上がるよう、じつと我慢をし、

「聞いてください。」

と言ってくるようになるまで子供たちの前に立たなかつた。

教師として力量のない者の手段かも知れないが、今こうすることで、今まで以上に精神的に成長してくれたらと思う気持ち

と、A子への期待を込めて遠くから歌声を聞いた。

五日後、やっと室長が現れた。それからというものの、子供たちは本当に自分たちの歌を歌おうと、一回一回心を込めて精一杯練習した。

A子は、合唱コンクールの思い出を次のように締めくくった。

歌は賞をとれなかつたけれど、私は最優秀指揮者賞をとれた。これは、私だけがとった賞ではなくて、みんなのおかげでとれたのだ。みんな、ありがとう！

確かに賞はとれなかつた。が、子どもたちの底力は、合唱コンクール予選で聞かせてくれた歌で十分に知ることができ、心の熱くなるのを感じた。





第一回朝日スポーツ賞受賞

五十年にわたるバスケット指導

元教育委員長

矢田 香子先生

第一回の朝日スポーツ賞を、元教育委員長で、岡崎ミニバスケットボール教室指導者である矢田香子先生が受賞された。

先生は、日本女子体育専門学校(現日女体大)時代は軟式テニスとやり投げの選手として活躍され、やり投げでは全日本選手権で五連覇を果たされた。昭和十二年、母校の岡崎市立高等女学校(現岡崎北高)へ赴任されてより五十二年間バスケット王国愛知を支える屋台骨として活躍してみえる。

- 平成元年度 第十七回自作 OHP-TPCコンクール (特選)
- ・加納千夏子 (矢作南小)
 - ・名倉 嘉章 (上地小)
 - ・河合 友子 (上地小)
 - ・大山 康弘・他 (男川小)
 - ・原田 平 (六ツ美中)
- 〈入選十六点、佳作二十八点〉

が参加した本大会において、今年も岡崎勢の活躍が光った。男子は、竜海中が準優勝、常磐中が五位、矢作北中が九位、女子は、矢作北中が三位と健闘した。特に竜海中は、終始好位置につけ、次第に順位を上げ、後半トップグループに入り激しい追い込みをみせた。最終ランナーではグラント勝負に入り、瀬戸南山中を追走したが、惜しくも残り百メートルで振り切られた。また、男子に先立って行われた女子の部では、大会前より順調な仕上がりを見せていた矢作北中チームは、堂々の三位入賞を果たした。なおこの記録は、本市の女子としては最高の記録であり、本市女子長距離界に明るい展望を開いた。

- 〈男子の部〉 一九・四キロ
- ・竜海中 五七分五二秒
 - ・常磐中 五八分〇七秒
 - 〈女子の部〉 六・八キロ
 - ・矢作北中 二七分四五秒
- 東海中向野さん、全国金賞
国際理解コンクール

日本国際連合協会主催の国際理解と協力のための各種コンクール入賞者の表彰式が一月二十日、県産業貿易館で行われた。中学生作文の部で東海中三年向野里子さんが全国金賞に輝いた。

竜海中男子準優勝
矢北中女子三位

県中学校長距離競走大会
十二月二十六日、愛知青少年公園を会場に、県下五十チーム

普及していない昭和四十二年、岡崎にその教室を開き、三年前には男子を全国優勝へ導かれた。練習は厳しいが、試合に勝てばいいのではなく、失敗した時

交通事故大幅増

—多い飛び出し四三%に—
昨年四月〜十二月の交通事故は、前年比三七%増の九六件で、中でも、中学生は五五%の大幅増となっている。
学年別では、小三・小一・中一の順に多く、この三学年で全体の四九%を占めている。
原因別では、飛び出しが四一%ある。
件・四三%と目立っている。細い道や車の影からの飛び出しが絶えない実状である。
なお、職員の交通事故も増加傾向にあることが憂慮される。
—ちよつと待て—
その一秒が命とり—
まだまだ交通規則が徹底されていない現状を自覚して、交通安全指導をしていきたいものである。
交通事故発件数(四月一日〜十二月三十一日)

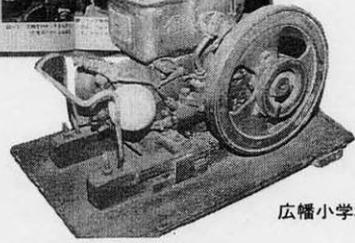
種別	小中学校						職員
	横断	飛び出し	接触	出会い頭	自損	総計	
1	3	4	6	1	14	1	1
2	3	4	1	1	9	1	0
3	2	13	2	1	20	2	7
4	2	2	5	1	11	1	5
5	1	3	2	6	6	2	0
6	1	2	1	1	5	3	-2
計	12	28	17	5	65	3	+15
1	3	6	2	1	13	1	+9
2	1	4	2	2	9	2	-1
3	2	3	1	3	9	3	+3
6	6	13	5	1	31	6	+11
総計	18	41	22	6	96	9	+26

職員	横断	飛び出し	接触	出会い頭	追突	相手過失	計
0	0	0	9	1	5	11	+2

泉



竜海中学校



広幡小学校

石油発動機

昭和三十三年文部省指導要領の改訂に伴い、中学校に技術・家庭科が新設された。当時は、日本の経済も先進工業国に向けて大きく前進し始め、科学技術の振興が叫ばれていた。

ここにとりあげた石油発動機は、それまでの農業生産に活躍していたエンジンを、技術・家庭科機械の学習教材として分解・整備の実習に利用されたものである。文部省の教材基準にはあ

げられていても、台数は少ないため、不要になった石油発動機をもらってきては授業に使っていた。

燃料は安価な灯油で運転でき、現在と比べると構造が単純である。クランク室のカバーを開くと、連接棒、ピストンが外部からもよく観察できた。また、気化器や空気清浄器なども原理そのままに近い形状をしており、理解もしやすい良さがあつた。

今では、もっぱら古き時代の遺物として歴史の学習や郷土産業資料となつている。

- ・表紙写真
 - ・表紙詩
 - ・カット
- 広幡小 山田 哲也
 広幡小 神尾 まゆみ
 福岡小 天野 しのぶ

この本を

- * 明治という国家 司馬遼太郎 ￥1800
- 日本放送出版協会
- * 子どもと環境 中垣 洋一 ￥1600
- 圭文社
- * 人生余熱あり 城山 三郎 ￥790
- 光文社
- * 猫だつて夢を見る 丸谷 才一 ￥1200
- 文藝春秋

※誕生日のアップルパイ 日本エッセイスト・クラブ 文藝春秋 ￥1250

'88年中に発表された有名無名の人々のベスト・エッセイ集'89年版である。

日常茶飯のできごとの中で、何を感じ何を考えるか、そこにさまざまな人生が現れる。同じようなことでも、文章の表現次第で、味わいはずいぶん異なってしまう。本書は、人生と文章を味わうにふさわしい好短編集である。

'83年版から'86年版までは文庫本になっている。類書として「女たちのベスト・エッセイ」も刊行されている。

お嫁さんをもらうには、わきの下の毛があつてはいけない。小学校一年の息子に言われて、世代の隔たりを痛感した。

ちまたで言われる男のおしゃれが、我が息子にも浸透していたとは。互いの価値感の差をうめながら子育てしていくのかと、すでにオバタリアンと化した妻のため息をついた。

オアシス

沈丁花が寒風の中で花芽をふくらませじつと耐えている。中学三年の生徒たちも、厳しい進路選択を乗り越え、新しい出発に備えている。

前任者研修も一年の終わりが近づく。昨年の自分と比べ今年の自分がどれだけ成長したか。一年を振り返り、この一年のまとめと次年度への下萌えの時である。

朝戸くる音も春めく音と聞く

寒さの最も厳しい季節ではあるが、冬のころに比べ、雨戸から漏れる陽光は時間も早くなり、まぶしさを増している。

正に、「光の春」と呼ぶにふさわしい。遊ぶ子供らの歓声も真冬とは違い、温かく響いてくる。

簡井梨花

ステージ狭くと熱演を見せる子供たち。その声に負けない迫力で機が飛ぶ。本番まであとわずかである。寒々とした外気をよそに、体育館の中は熱気が漂う。一言しかせりふのない子供にも、一つのことを成し遂げた喜びを抱かせてやりたい。ホルテージはさらに上がっていく。